

日本大学工学部

校友会報

第 61 号

平成10年3月1日

目 次

ごあいさつ	2
平成9年度(第40回)通常総会報告	3
第17回「母校を訪ねる会」報告	4~6
支部総会・同窓会・クラス会・その他 7~12	
校友レポート(滝沢秀行)	13~15
若葉マーク・がんばり記(宗方直美)15~16	
訃報(倉田 博先生)	16
校友短信	17
工学部開設50周年記念事業	18~19
通常総会・総合名簿・母校を訪ねる会案内	20



校友会事務局がある30周年記念館

ごあいさつ



日本大学工学部長

蓬田和夫

景気回復のきざしがなかなか見えてこない先行不透明な状況の中で、校友の皆様にはそれぞれの分野で活躍されておりますことを心からお喜び申し上げます。

昨年は本学部開設50周年に当り、10月18日には関係者多数のご出席のもと盛大に記念式典をとり行うことができました。記念事業としては、900ページ余りの大冊「工学部50年史」、なつかしい写真や美しいキャンパス風景の一杯入った写真誌「工学部50年の歩み」、25年も続いた教養講座の「講演集第2集」等の刊行、また記念懸賞論文の募集、学部のシンボルマークの制定等があります。シンボルマークは日本大学のNと工学部のEをデザインしたもので、すでにいろんなものに使っておりますが、校友の皆様もご利用頂ければと思います。記念行事としては、都市景観に関する記念シンポジウムを福島県と共同主催で「'97うつくしま景観フォーラム」として11月1日に行いました。最大の記念事業は50周年記念館の建設です。これは平成7年に策定したキャンパス再開発計画の第一歩となるもので、食堂や購買等主として豊かな学生生活を送るための施設ですが、校友が大学を訪れたときに憩えるようなスペースも用意してあります。地上4階地下1階、延床面積6,500平方メートル、記念式典の日に地鎮祭を行い着工、平成11年春竣工の予定です。この事業資金の一部に当てるべく関係各位に募金をお願いしましたところ、校友会及び校友の皆様から沢山のご寄付を頂きました。厚く御礼申し上げますとともに今後共ご支援の程宜しくお願い致します。

この他昨年は、大学入試センター試験に初めての参加、桜の時期にキャンパスの一般開放、大学院情報工学専攻修士課程の設置、カリキュラムの改定等があり、今年4月には電気工学科を電気電子工学科と改称します。

校友の皆様益々のご活躍を祈念し、ごあいさつといたします。



日本大学工学部校友会長

木村圭二

会員の皆様にはますますご清栄のこととおよろこび申し上げます。

工学部は、平成9年10月18日に開設50周年を祝って、記念式典・祝賀会並びに50周年記念館地鎮祭が盛大に挙行されましたことは、真に喜びにたえません。

郡山市徳定の旧海軍航空隊跡に東京神田駿河台より、専門部工科が昭和22年に移転してから、平成9年で50周年の節目を迎えました。木造兵舎からスタートしたキャンパスも今では鉄筋コンクリート造の校舎が立ち並び、教育環境もすっかり整備されました。建設中の50周年記念館は地下1階、地上4階、延べ床面積約6500㎡の建物で、主に、学生の厚生向上のための施設となります。校友会もこの記念館の一室をお借りすることになっており、平成11年の完成時には事務局をそこへ移転する予定となっております。

校友会が管理運営してまいりました会員管理名簿のデータを日本大学本部へ譲渡することについて、平成9年度総会で議決を戴きましたが、この度、本部校友会、工学部、工学部校友会の三者間で協議が整い覚書を取りかわしました。今後は細部調整を行い、管理・利用等に不都合の生じないような有効活用を図ることになっております。

恒例となった「母校を訪ねる会」も、平成9年度には17回目を数えます。今まで参加された校友は、1,800名を越えましたが、残念ながら該当年度に参加できなかった校友も多数おられます。この方々の声として、是非、もう一度母校を訪問したいとの要望があります。このことから校友会創設40周年記念行事の中で、広く校友の参加が可能かどうか、現在、検討を重ねている所です。

今後は大学と校友会の相互の連帯意識の高揚と、21世紀へ向かってのさらなる発展のため、会員皆様の積極的なご協力をお願いすると共に、皆様のますますのご健勝とご活躍を心からご祈念申し上げます。

平成9年度第40回通常総会報告

第40回通常総会は、平成9年4月5日(土)午後1時より、日本大学会館に於いて開催された。総会は加藤本副会長の開会の辞で始まり、次いで木村会長から「本年は工学部開設50周年に対する校友会からの寄付、本部校友会に対する工学部校友会からのデータの提供及び工学部校友会創設40周年記念事業等について御審議をいただきたい」旨の挨拶があった。次に、議長に土木5回卒の小山田克己氏、議事録署名人に杉崎、橋本両常任幹事、書記に曾部・野尻両常任幹事が選出され議事に入った。報告第1号・平成8年度会務報告は、事業担当の村田常任幹事から、承認第1号及び第2号は会計担当の伊藤常任幹事より報告があった。これに対する会計監査報告が石井監査よりあった。続いて議案第1号・平成9年度・事業計画並びに議案第2号、第3号の平成9年度一般会計予算及び特別会計が提案され、いずれも承認された。更にその他の議案として、関東支部の設立及び工学部校友会のデータを本部へ提供する件他の議案が審議され、いずれも賛成多数で可決された。これにより総会は、手塚常任幹事の閉会の辞で終了した。総会終了後、恒例の懇親会が本部か

ら梶原常務理事、蓬田工学部長他多数の来賓出席のもと、同所で和やかに行われた。

歳出

款項	種 目	予算額	繰越	予算現額	決算額	残 額	付記
事務費	1 給料手当	4,800,000		4,800,000	4,659,658	140,342	
	2 保険料	350,000		350,000	331,532	18,468	
	3 交通費	700,000	46,000	746,000	746,000	0	
	4 旅 費	50,000		50,000	7,060	42,940	
	5 交際費	600,000		600,000	524,000	76,000	
	6 書用費	250,000		250,000	241,911	8,089	
	7 備品費	230,000		230,000	77,662	152,338	
	8 印刷製本費	300,000	24,965	324,965	324,965	0	
	9 通信運搬費	500,000		500,000	371,569	128,431	
	10 修繕維持費	10,000		10,000	0	10,000	
	11 光熱水費	40,000		40,000	30,000	10,000	
	12 分担金	430,000		430,000	430,000	0	
	13 雑 費	150,000		150,000	50,150	99,850	
事業費	計	8,410,000	70,965	8,480,965	7,794,507	686,458	
	14 組織対策費	1,000,000		1,000,000	706,334	293,666	
	15 会報発行費	5,300,000		5,300,000	5,057,503	242,497	
	16 会員管理費	2,800,000		2,800,000	2,376,808	423,192	
	17 名簿作成費	500,000		500,000	0	500,000	
	18 下宿対策費	10,000		10,000	8,501	1,499	
	19 図書供与費	300,000		300,000	300,000	0	
	20 式典費	2,400,000		2,400,000	2,147,085	252,915	
	21 母校訪問費	400,000		400,000	369,422	30,578	
	22 負担補助助費	600,000		600,000	550,000	50,000	
	計	13,310,000		13,310,000	11,515,653	1,794,347	
会議費	23 総会費	700,000	45,662	745,662	745,662	0	
	24 役員会費	300,000	66,847	366,847	366,847	0	
	25 連絡協議会費	300,000	34,996	334,996	334,996	0	
	26 旅 費	900,000	18,150	1,085,150	1,085,150	0	
	計	2,200,000	102,655	2,302,655	2,532,655	0	
繰出金	27 関東支部設立金	300,000		300,000	176,196	123,804	
	28 平成9年度校友会創設金	3,000,000		3,000,000	3,000,000	0	
積立金	計	3,300,000		3,300,000	3,176,196	123,804	
	29 積立金	1,000,000		1,000,000	1,000,000	0	
予備費	計	1,000,000		1,000,000	1,000,000	0	
	30 予備費	780,000	△403,630	376,380	0	376,380	
	計	780,000	△403,630	376,380	0	376,380	
合 計		29,000,000		29,000,000	26,019,011	2,980,989	

歳入額 30,771,131円
歳出額 26,019,011円
差引残額 4,752,120円を翌年度へ繰越しとする。

財産の状況(平成9年3月26日現在)

単位:円

一般会計	引当財産	運用財産	合 計
4,752,120	4,604,933	39,600,000	48,957,053

平成8年度職員退職給与特別会計収支決算書

歳入

単位:円

款項	種 目	予算額	決算額	比較増減	付記
繰越金	1 前年度繰越金	4,345,090	4,345,090	0	
	計	4,345,090	4,345,090	0	
繰入金	2 職員負担金繰入金		75,504		
	一般会計より繰入金	300,000	176,196		
	計	300,000	251,700	△48,300	
雑収入	3 雑 収 入	4,910	8,143	3,233	
	計	4,910	8,143	3,233	
合 計		4,650,000	4,604,933	△45,067	

歳出

款項	種 目	予算額	繰越	予算現額	決算額	残 額	付記
引当金	1 職員退職引当金	4,650,000		4,650,000	0	4,650,000	
	計	4,650,000		4,650,000	0	4,650,000	
合 計		4,650,000		4,650,000	0	4,650,000	

歳入額 4,604,933円
歳出額 0円
差引残額 4,604,933円を翌年度へ繰越しとする。



(総会審議風景)

平成8年度一般会計収支決算書

歳入

単位:円

款項	種 目	予算額	決算額	比較増減	付記
会 費	1 終身会費	10,000,000	10,460,000	460,000	
	2 入会金	11,000,000	12,160,000	1,160,000	
	計	21,000,000	22,620,000	1,620,000	
繰越金	3 前年度繰越金	7,448,129	7,448,129	0	
	計	7,448,129	7,448,129	0	
雑収入	4 預金利子	500,000	363,502	△136,498	
	5 名簿代金	36,000	67,500	31,500	
	6 雑 収 入	15,871	272,000	256,129	
	計	551,871	703,002	151,131	
合 計		29,000,000	30,771,131	1,771,131	

「母校を訪ねる会」第17回目を開催

昭和22年、現工学部が、郡山市に移設されてより平成9年まで、半世紀の年月を数えるに至りましたが、この間、工学部が輩出した卒業生は38,463名の多きに達しています。これらの方々は、まぎれもなく、それぞれの年代が課した社会的使命を立派に果たしてきたことは申すまでもありません。工学部が卒業生諸氏に対して、古巣のキャンパスへ招聘し、その労をねぎらい、同時に学部現況の情報を提供することによって、より一層活力ある社会活動の一助とさ

れたいと願い、校友会と共催で本会を運営することになりましたが、昭和56年発足以来今回で第17回目となります。本年は、159名のご出席で、通算1,766名の方々が来訪されました。最近では家族単位の来訪者も多くなり、日本大学への進学の手針にもなっているようです。加えて恩師や校友との語らいで求人情報の活用もあるようです。平成10年秋には、第18回目の開催を予定しています。多くの方々のご来校をお待ち申し上げます。



「母校を訪ねる会」に出席して

大浦 弘 夫

平成9年度の母校を訪ねる会が開催され、第5回及び第25回卒業生が元気で、しかも多数出席されましたこと心からお慶び申し上げます。土木5回卒は大学に浪越先生、郡山には高橋社長などが活躍されておる関係上、同級会の機会に恵まれました。然し、久方振りに母校を訪ねて、目を疑う程の素晴らしいキャンパスに驚嘆！流石われ等が母校と心から誇りを覚えた次第です。私達は卒業以来、振り返るいとまもなく、日々前進あるのみの連日でした。今回40年を経て懐かしいクラスメートとキャンパスライフとのタイムカプセルで暫し懐古、花を飾りました。これはひとえにあの木造校舎から現在のキャンパスまで築き上げて来られた日本大学当

局並びに諸先生方の並々な御尽力あつての賜ものと深甚なる敬意を表する次第であります。現在第5回卒業生は後輩に劣らじと殆んど現役で精進しており、40年間に亘る建設功労賞で白髪老顔は益々光り輝いております。今後も吾が日本大学校友を心の支えとし、かけがえない伴侶を友としてより一層努力する所存で



す。結びに日本大学の限らない発展と関係各位の益々の御健勝、御活躍を心から御祈念申し上げます。

(土木5回卒) 環境エンジニアリング株式会社技術顧問

「母校を訪ねる会」に出席して

元 吉 克 臣

母校を訪ねる会に出席のため、20年ぶりの郡山に心弾ませて、大分空港より東京へ。空港にて一足先に着いた平野君と三村君に合流し三村君の自宅で一服、一路郡山へ。当時は特急で東京より3時間かかっていましたが、現在新幹線で1時間半ほどには驚きました。郡山到着後すぐさま20年前の記憶を辿り、町を一巡り。今も変わらない懐かしいアーケード街、反面、きれいに整備された町に変貌した郡山を複雑な気持ちで時間を忘れ散策し、うっかり同級会に遅刻となり、慌てて会場入りした次第です。会場には懐かしい顔ぶれ、そしてお世話になった先生



方にお会い出来、思い出や近況報告等楽しい一時を過ごさせて頂きました。明日、母校を訪ねる会に参加し、在学当時の懐かしい校舎や近代的な建物、そして20年後輩達の元気にはしゃぐ北桜祭を見学して母校の発展と共に20年という月日の流れの速さを感じた感動的な一日でありました。母校を訪ねる会を終え、「このまま帰るのでは」と言う事になり、急遽、会津若松の東山温泉へと平野君、中野君(群馬)、小松君(札幌・建築学科)と共に一泊し、学生時代の思い出と素晴らしい母校を満喫し感激と共に郡山を後にしました。最後にこの会を開いて戴いた工学部、そして級友幹事の方々に深く感謝し、母校の繁栄と校友の皆様方の御健康を御祈り致します。(土木25回卒)

「母校を訪ねる会」に参加して

竹 中 忍

はるばるオホーツクの地、北見市から「母校を訪ねる会」に、友人と会う事を期して、又20年ぶりの校友に会える事を心待ちに郡山に向かった。久々に見る顔は懐かしく其れ其れの年輪

を感じ、歳月を知る思いでした。地元に住ると減多に学友に会う機会も無く、非常に懐かしくなるもので、友人との気兼ねない話しや、学生



時代の思い出が湧き出るものでした。当日は、合唱団の後輩宅に一泊し、夜中で大変迷惑をかけましたが、翌日は、北桜祭に行き、女子学生の多いのに驚かされ、又学内の建物も増々整備されて、発展しているのかと感じました。地方にて個人で仕事をしている私にとって、最近の技術の進歩の早さからか、仕事上難題にぶつかる事も度々有り、身近に相談できる学友や先生が、と思う時もしばしばです。近年の情報産業のインターネットでデジタルデータを活用すれば、距離間も近づき、情報の発信基地としての、開かれた母校に増々の期待を新たに認識すると共に、各研究室でホームページを開き情報の公開を是非行ってもらいたいと感じました。

終わりに、こうした機会を与えてくれた友人や工学部及び校友会、同級の幹事の方々に心より感謝致します。母校の益々の発展と校友の皆様のご多幸を祈念いたします。(建築25回卒)

「母校を訪ねる会」に出席して

太 田 浩 二

10月25日、20年ぶりに同級会及び母校を訪ねる会に出席する為、船橋駅10時35分発の電車に飛び乗った。途中、熊谷駅で下車し学生時代に下宿が同じだった菊池洋君、高野幹夫君達と合流、車に乗り換えて晩秋の東北路を北上し、夕方郡山に到着。そして、今夜宿泊場所となる日大研修会館に車を置き、同級会が開催される「ホテルハマツ」へと向かった。ホテルでは発起人の橋本純君達が時遅しと待っていた。

尚、会には懐かしい25人の顔が揃い、来賓として出席戴いた小野沢先生の挨拶でなごやかに開会した。宴が進むにつれ近況報告や学生時代の思い出話に花が咲き、最後は応援団OBの古川隆君の音頭で校歌を斉唱し大盛況の内に一次会が終了した。また、二次会以降はそれぞれが思い想いの場所に散り久々の郡山の夜を満喫した事だろう。

翌26日は少し早めに研修会館を出発して昔お世話になった下宿を訪問し、1時間程談笑した後北桜祭で賑わう大学へと車を走らせた。



今回の母校を訪ねる会には約150名の卒業生が参加し、中庭での記念撮影から歓迎行事がスタートした。中講堂に場所を移して行われた懇親会では蓬田学部長より大学の現状や今後のビジョンに関する話があり、引き続いて校友会長・出席者代表の挨拶、最後に化学を教えて頂いた宇野原先生の万歳三唱で閉会となった。しかし、閉会後も話は絶えず後ろ髪を引かれる思いではあったが、2年後の再会を約束して夕方の新幹線で帰路についた。

最後に、このような機会を与えて下さった関係者の皆様に感謝申し上げます。

(機械25回卒) 大洋製鋼(株)

「母校を訪ねる会」に出席して

柏木 達郎

卒業して20年、家内が郡山産でもあり卒業後郡山に6回ほど来ておりますが大学を訪れたのは、今回が初めてでした。最近のキャンパス内様子は、話で聞いていましたが実際に見てみると今の学生を羨むほど素晴らしい環境になっていることに驚きました。合気道部の道場では、後輩が暖かく迎えてくれここだけは何も変わらず懐かしさが込み上げてきました。懇親会后、三年程下宿した安積町日出山のほうに雨の中でしたが学生の頃をあれこれと思い出しながら歩いてみました。福岡から出てきて下宿での最初の夜が不安で眠れなかったこと、冬は毎日が木枯らしでこの阿武隈川が凍りつくほど寒かったこと、友達と下宿で酒を飲み明かしたこと等々思い出され、福岡から遠く離れたこの地で四年間過ごしたことが今の自分の大切な要素の一つになっていることを実感しました。また旧友にも再会し懐かしい顔とほんの一時でしたが語り合うことができました。私にとり卒業後の20年は本当に短い時間でしたが、20年の重みを感じずしりと感じた日でもありました。

校友会関係者の方々の素晴らしい企画に感謝

し、母校の益々の発展をお祈り致します。

(電気25回卒) 柏木設備工業(株)

母校を訪ねる会に参加して

奥田 邦彦

さわやかな秋風の中、逸る気持ちで郡山の駅に降りた10月25日。明日の母校を訪ねる会に便乗し、今夜は工業化学科25回卒業生の仲間と萩姫の湯につかりながらかつての学窓の思い出をたどり旧交を温めようと地元出身の有志面々の御尽力により磐梯熱海温泉「楽山」での宴となった。ふと、昔ながらの駅前商店街の店先に立つと余りの懐かしさに思わず込み上げて来るものがあった。そしてその夜は誰もが時を忘れ身を忘れ、五分の一世紀を語るには時は余りにも短く話は尽きなかった。翌日、北桜祭でキャン



パスはどこも賑わっていた。正門からの桜並木は相変わらず大地の母の様に我々を迎えてくれた。展望レストランからは、我が青春とも言える阿武隈川を一望出来、若き時代が走馬燈の様に思い出されただ感謝するのみ。この地を出発点として早20年、すでに折り返し地点にさしかかった今、己の歩みを顧みてこれからの人生目標をより鮮明にしていくことへの使命を痛感し、再認識することが出来万感胸にせまる思いでした。最後になりましたが、多方面に亘り協力頂いた事務局の方々、そして校友会の皆様には心よりお礼申し上げます。有難うございました。

(工化25回卒)

お 願 い

会報発行委員会

会員の皆様には、日常生活の中でこれは校友に紹介したいと思う事柄や、様々な会合を持たれた方がお有りと存じます。

これらを会員諸氏に広く伝達する主旨から、「校友情報」として会報発行委員会までお寄せ下さることをお願い致します。

尚、ご投稿は、下記の要領をお願い致します。

コメント投稿字数 70字まで

写真1枚 (12×8cm) 以上

支部総会・同窓会・クラス会・その他

平成9年度四国支部総会

支部長 北岡 保之

8月30日、総会を例年どおり高松市内わたや旅館で開催しました。4県から29名の参加があり、東京での本部総会の報告、名簿整理について、ゴルフ同好会の結成、各県単位の活動状況、支部活動の活性化など話し合い、役員の再任が承認され総会を終えました。



懇親会は六車氏の司会で始まり、校友会の木村圭二会長より大学・校友会の近況、郡山の発展など報告いただき、徳島県の桑村氏の乾杯の音頭で開宴となりました。酔が回るなか、恒例の近況報告、情報交換、カラオケと盛り上がり、最後に寮歌・校歌の大合唱で存分に旧交を温め、来年の再会を約し、無事解散となりました。

支部活動は夏の総会、ゴルフコンペ、また折に触れ集まり飲んでいます。今後とも気軽に参加できる魅力ある会にしたいと思いますので、ご一報いただければ幸いに存じます。

(工化14回卒) 高松市下水道部長
087-839-2691

平成9年度東海支部総会

下里 正美

私達東海支部(愛知・岐阜・静岡・三重)の集まりは、7月に行われる総会とゴルフコンペが年2回、そして忘年会が通例の如く行われています。支部総会の様子を、出席されなかった東海支部地域の皆さんに特にお伝えしたいと思います。

総会には母校工学部の先生方を迎え、なごや



かに開催しております。総会は、会議と懇親会に分けて進行します。毎年約60名程度の出席者があります。第1回卒業の先輩諸氏も元気に出席されておられます。60名の校友の大部分が、第30回卒業までの人で占められるものの第40回卒業前後の校友まで、幅広い方々が参加しております。静岡県からの出席者もおられます。総会は、型にはまった堅苦しいものでなく事業報告会計報告が淡々とあり、支部長からの支部現況等私見をまじえながらの話があり、そして母校からおいでいただいた先生から工学部の現況等のお話を伺った頃はクライマックス、出席者も先生の話に興味深く聞き、母校や郡山を懐かしがったりするのもこのタイミングの頃です。先輩、後輩が入り交じりかなり和んで来た頃総会が終了し、懇親会の場へと席が移ります。先輩が音頭を取って口火を切り、出席者それぞれにいくつもの輪をつくり、自分の学生時代へそのままタイムスリップです。60歳代の人であっても30歳代の人であっても、自然な交流の中で仕事の様子や家族の話に花が咲いてきます。このあたりの雰囲気は校友の会ならではの安心感に満たされます。同級会でなくても、日頃、同窓の中にいない者にとって、工学部の同窓の中にいる、という感覚は出席した者だけのモノであり“たまにはいいよ”とお勧めしたいと思います。

(土木19回卒) 下里建設㈱

平成9年度九州支部総会報告

事務局長 脇山 亨治

1. 会名称 第17回日本大学工学部
九州支部総会
2. 日 時 平成9年10月9日(金)
18:30~
3. 会 場 福岡市中央区天神「平和楼」

総会は例年通り、湯村九州支部長(建10回)の挨拶で始まり、上村君(建28回)より会計報告があり乾杯の後、和気あいあいの中、懇親会が進行されました。今年は例年より少し多めの出席でS35卒からH9卒までと幅広く1500km離れた懐かしい郡山を思い出し『昔はこうだった、今はこうなってます。』などの会話が絶えませんでした。又、お忙しい中、郡山から工学部校友会を代表され加藤木副会長様にご出席頂きまして本当にありがとうございました。中州で二次会の後、30分程並んで食べた博多ラーメンの味はいかがでしたでしょうか。博多祝いめでた、博多一本締めと楽しい九州支部総会をもっと充

実させたいと思っておりますので、今回はもっと多くの参加お待ちしております。



半世紀の思い出

国分貞典

“ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず” これは古典「方丈記」の一節ですが、この2枚の写真も白黒のものからカラーに移るまでに50年の歳月が流れて居ります。白黒の方は開校間もない頃に当時の木造校舎をバックにした専門部工科土木科1回生達であり、カラーの方は昨年の10月母校の50周年をお祝いして磐梯熱海温泉の「四季彩一力」でクラス会を開いた時のものです。

私達のクラスは戦後間もない昭和22年に、駿



河台から移転して来たばかりの専門部工科に入学した仲間達で、軍隊や海外からの引揚者等も多数居り、年齢もまちまちでバラエティーに富んだクラスです。

校舎と言っても海軍航空隊が使用していた木造兵舎をそのまま転用したもので、風雪をヤット凌げる程度の建物で、冬は教室の片隅に火鉢が一つ置いて有ると云った状況で震えながら先生の講義を受けたものですが、それでも勉強に対する熱意は旺盛で、戦争で荒廃した国土の復興は俺達がやるんだと毎日張り切って通学したものです。

私達が入学した頃は新幹線も高速道路もない時代ですので、上野までは汽車にとことこ揺られて片道6時間はかかりました。開校当初は

①月例会を、毎月第三木曜日に福岡市中央区天神三和ビル地下『ロビーサアン』にて18:30～20:30 自由参加で行っております。(毎回5人～10人の参加者ですが、同級生や同じ会社の先輩や後輩、転勤や単身赴任で福岡にいる人など引き連れてもっと来てください。

②5月27日(火) ザ・クラシックCCにて3組12人のゴルフコンペが好天に恵まれ行われました。結果は成島先輩(土12回)が優勝。

③11月3日、柳川は北原白秋の生誕地にて『白秋祭川下り』を柳川の砥上先輩(建26回)のお世話で奥様や子供達と一緒に楽しく、盛大に行われました。(建築29回卒) 株北洋建設

測量実習用の器具類も揃って居らない状態でしたので駿河台の本校まで出向きまして、当時の吉田事務長にお願いをし、トランシットやレベルを受取り汽車に担ぎ込んで持ち帰り、測量実習をした思い出もごさいます。

また当時本校と兼務されて居られた力学の当



山先生や測量の亀田先生、河川の楠先生、水理の粟津先生は、東京からお見えになりますと連日集中して講義に当たって居られましたが、先生方のご苦労な顔が浮かんで参ります。

私達は昭和25年春卒業しましたが就職先は官公庁が過半数でございました。私の場合も福島県庁に勤める様になりましたが、土木事業も当時はまだ都市部の震災復興事業が花盛りの時代で、田舎では砂利道の補修や木橋の修繕等が主な仕事の内容であり、何処へ行っても時代劇のロケが出来る風景でございました。

またその頃の設計者は総てが“手造り”の時代で、電卓もコピーもなく加減乗除はソロバン、浄書はカーボン紙を使用し、青写真に至っては“天日焼き”と称してオイルペーパーに烏口で墨入れをした原図に、感光紙を当てがって太陽光線で焼きつけると言った原始的な方法であり、お天道様の有り難さを身を以て体験させられたものでした。

私達もいつの間にか古希の年代を迎えてしまい卒業時73名おりましたが、すでに3人に1人

の割合で故人になってしまい一抹の寂しさを感じずには居れませんが、日大に学び社会人としては昭和30年代～50年代の日本の高度成長期の担い手として活躍出来た事を誇りに思い感謝いたして居ります。

この半世紀の技術進歩は目ざましいものであり、インターネットの時代を迎えています。その進歩は加速される事と思いますが、如何にハード面が進もうとも日常生活で最も大切な事は人間関係であり、昔から言われております「駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草履をつくる人」で、乗物が自動車、新幹線、ジェット機とどんなにスピード化されようとも、持ちつもたれつの関係は昔のままにして置きたいな、と願う今日この頃でございます。

最後になりましたが母校が百周年に向かってますますのご発展を心から祈念いたします。

(専門部工科土木1回卒)

土木4回卒同期会

青木孝松

平成8年度の「母校を訪ねる会」(8年10月20日)に第4回と第24回の卒業生が招待され、私共土木4回卒業生(出席者7名)は、お陰様で40年ぶりに再会の歓喜と母校が大きく発展している姿を見聞きし、深く感動を受けました。

ところで、私共は卒業以来、一度も集まる機会が無かったことから非常に残念に思っていました。図らずも「母校を訪ねる会」に出席したメンバー全員が音頭を取り、来年の学部開設50周年の慶事を記念して同期会を催すことに話がまとまり、1年後の再会を約束して郡山を後にしました。

平成9年11月7・8日の両日、磐梯熱海温泉「ホテル向滝」に参集。級友17名は遠くは沖縄より全国各地から駆けつけてもらい、待望の同期会を盛大に開催した。

土木4回卒(昭和31年3月)の同期生は、就職難の時代でしたが殆どが建設関係の道に進まれました。そのことから仕事を通じて個別の出会いはいずれには有ったようですが、41年ぶりの対面は、それぞれ万感胸に迫る思いで再会を果たすことが出来ました。しかし、残念にも当時ご教示いただいた先生方の殆どが故人になられたこと。また、38名の級友のなかに7名の方が他界されました。誠に痛恨の極みであり、心から御冥福をお祈り申し上げます。

懇親の宴は、先ず各人が健康で再会の喜びと近況を紹介することから始め、続いて学生時代の勉強、スポーツ、寮生活等を酒を酌み交わし

乍ら青春の思い出を語り、旧交を温め、懇談は夜の更けるのも忘れるほどの盛況で有意義な一夜を過ごした。



今回の開催は平成11年秋と決め、2年後の再会を誓って、同期会は無事終了する。

なお、今回都合で出席できなかった方々も、次回には是非出席していただけますようお願いしております。発起人の皆様、幹事の安藤・仲田の両君には大変お世話になりました。

終わりに「母校を訪ねる会」と言う素晴らしい企画は、他に例を見ないと聞きます。校友会並びに学校関係者のご高配に衷心より感謝を申し上げ、母校の一層の躍進と校友皆様のご多幸を祈念いたします。(土木4回卒)元青森県参事

現株復建技術コンサルタント

“はぐるま会”

一条義明

“はぐるま会”(機械科11回卒同窓会)を平成9年11月22日に静岡県富士市で開催、翌23日に希望者のみで富士山研究ツアー(富士山の周囲360°見学)を行った。平成8年東京での“はぐるま会”の折、富士市でという希望が有り、静岡県在住の織田・須藤・一条が幹事となり、酒場でのミニ同窓会を重ねて今回の立案を致しました。当日東海道新幹線新富士駅へ上下線が到着する度に、なつかしい顔が次々と現れ、中には卒業以来の顔もちらほら。マイクロバスで会場の“角山”へ。北は福島県の阿曾・橋本耕吉(日大工)君、栃木の森田君、南は神戸の国



森君、京都の小林弘幸君等遠方からも集まって戴き感激。総勢26名の代表として、国森君の発

声で乾杯。その後制限時間5分以内という事で自己紹介を始めたものの、自社の自慢、孫の自慢、趣味、子供の嫁、むこ探し、定年後の話等々延々3時間余・・・・。地元でなければなかなか食べられない生じらすと桜えびのかき揚げに舌づつみを打ってもら。当日はあいにくの曇天で富士山が見えないので、筆者撮影の富士山写真4ツ切約80枚を見て戴いたり、2次会費用の一部として、数枚の写真をオークションにかけ完売した。次回は来年か再来年に東京で奥村・大場・森田君の幹事で、次々回は郡山で母校を訪ねる会を兼ねて開催するよう阿曾・橋本君に幹事を依頼、了承を得て散会。当然それだけではすまず宿泊場所の“ホテル光年”で22名で二次会。ここでも盛り上がりあつという間の2時間半。翌朝富士山研究ツアー一行は18名。明け方雨はあがったものの、ホテルから一瞬しか富士山は見えない。1ヶ月半程雨無しで直前迄夏富士同然だったが、今日は雪が冠った美しい富士山のはずという幹事の言葉もむなし。最初の水ヶ塚公園でもガスで見えない。バスが御殿場方面に向かううち突然真青な空の中神々しいばかりの冠雪の富士山に車内一同感激。花の都公園・忍野で記念写真と芸術写真を各々狙ってご機嫌の面々。富士山の周囲360°を眺めて16時新富士駅で名残り惜しんだり、再会を約束してそれぞれ帰途へ。感謝の言葉と笑顔で疲れのふっ飛んだ一日でした。（機械11回卒）

電気工学科第13回生同級会報告

中上 久義

若干の不安の中での同級会であった。33年の歳月の故である。

平成9年11月8日（土）午後5時半から、東京上野のふくしま会館で、との開催案内に、最初の出席者が幹事の前に現れると、忽ち会はス



タートしたようなものだった。次々と集まる級友は、卒業以来初めての再会となる懐かしい顔を認めあつては談笑の渦で定刻前の会場を熱気に包んでしまった。

こうして始まった電気工学科13回生の卒業後初の同級会は、同級生で母校の教授である小林力君から名簿と同級生の消息の提供を得て、在京の鈴木高夫・羽田昭造両君等の有志によって準備され、36名の出席を得て進められた。長い年月を挟んでも顔を合わせれば気持ちは瞬時に大学時代にタイムスリップ。予定時間も瞬時にオーバー。閉会間際の校歌も「唄えるかな」の声も、始めてみれば青春時代の記憶の強さを証明したようなもの。「若きエンジニアも唄おう」となったのは、雰囲気心地よさに今少し浸っていたい、との気持ちの表れであったのか。

開会前の不安は全くの杞憂に終わった。33年の空白は、むしろ、郡山での我々の日々が如何に濃密であったかを知らしめた。そして人生の円熟期を迎えようとしている今、互いの人生の更なる充実の基盤に資するべく同級会を正式に発足させるべきと衆議一致、今後の方針が提案・承認された。また、事務局を浅川正名君が経営する会社（株サステナ tel 03-3367-3472代）に置かせてもらうこと、2年後に郡山で再会することを決定して閉会となった。次回の会では更に大勢で母校にエールを贈りたいものである。

（電気13回卒）土浦日大高校

〈空手道部五十周年 記念式典に参加して〉

小俣 克彦

秋も深まった郡山。十月二十五日、工学祭と時を同じくして、体育会空手道部の、創部五十周年記念式典が、開催されました。当日は、校内で現役学生の演武会もあり、一部のOBは、午前中から武道館に集まり、学生の練習に参加し、久しぶりに心地よい汗を流すと同時に年を感じながら、会場の市内「はまつホテル」に向かいました。現役時代は、グラウンド或いは道場で、共に血の汗を流したOBが、全国から約

八十人集合。開式前に、会場のあちこちで、再会を懐かしむ人の輪が出来ました。

懇親会第1部は、和田先輩の司会で水野部長



先生・蓬田学部長の挨拶に始まり、創部者で初代主将の、渡辺先輩・故岩田師範のご子息で、現師範の岩田源三先生の挨拶と、厳粛な中にも懐かしいお話しがありました。

一転して、第2部は、水沼先輩の司会で、学生時代に、タイムスリップ。応援団の友情参加もあり、校歌斉唱から、日大節。また、有志による北心寮歌、年代順の思い出話と、時を忘れて笑い、盛り上がった2時間でした。

最後に、全員で円陣を組んで、再び校歌を合唱し、再会を約束して解散しました。

空手道部OBも、全国で頑張っていますが立派になった武道場を拝見し、旧友との話しも出来、4年間空手道部を続けて良かった事を、再確認したひとときでした。(機械17回卒)

日本拳法部創立30周年記念式典

日本拳法部OB会会長 田淵 芳孝

工学部日本拳法部は創立30周年を迎えたことを記念して平成9年9月27日、郡山ビューホテルに於いて、工学部より蓬田学部長、森前体育会会長と工学部拳法部部长五郎丸英博先生、そして日本拳法連盟より服部正己師範(立正大)、犬塚稔哉事務局長(青山学院大)、東日本学生拳法連盟より東洋大・重細亜大・明治学院大・駒沢大・国士舘大・日本大の各大学拳法部OB会会長ら諸氏の御臨席のもと、工学部日本拳法部部員とOB合わせて総勢80名の参加により式



典を執り行いました。式典当日、行事として、OB、現役部員による記念試合を(於拳法部道場)計画しておりましたが、OBの参戦希望者が多くあり、OBによる懐旧大会になりました。優勝したのは、現在40歳の第11代主将高橋秀和(機27回卒)四段でした。

近年、体育会系のクラブにはかけりが見え、文武両道といった言葉は死語になりかけていますが、工学部日本拳法部は、この30年間で220余名のOBを送り出し、嬉しいことに本年も新入部員11名が入部して健闘中です。これも偏に、蓬田学部長をはじめとする工学部関係各位の、

ご理解ご協力の賜物と、会報の紙面をお借りして深甚なる謝意を申し上げます。私達は、今後も学生とOBとの連携を大切にし、また部活動を通じて親交を得た他大学との友好関係も、合わせて永続して参る所存です。

(土木17回卒) 熊南建設株式会社代表取締役

「滑空研究会創立40周年を迎えて」

滑研OB会長 山本 和男

滑空研究会は昭和32年夏に設立し、以来190余名の会員が社会に巣立ち今日に至る。本年度はその40周年の大きな節目に当たるので、母校に集い、現役・OBの合同で「滑空研究会創立40周年式典」を平成9年10月25日、北桜祭の最中に学部長、学生課長、滑空研究会元会長等をお招きし、学部内講堂で挙行了した。



会場は懐かしい顔、顔。空に憧れた者達だけにJAL機長、ANA機長、海自機長、航空機メーカー重役等空と直結した世界でご活躍の方々から今日も社会人滑空クラブでグライダーを楽しんでいる方々、趣味が高じ、モーターグライダーを購入し日本中の空を楽しんでいる方々等多彩な顔触れの数々。また、窓の外に目を移すと、正門から本館までの道端に、創立時に活躍した「霧ヶ峰式初級練習機ハト号」以下各時代時代で会員の育成訓練で活躍した複座型中級練習機、複座型上級練習機、誰もが卒業まではそれで空を翔けて見たいと憧れた単座型ソアラ等約10機、ズラリと勢揃いしている光景は、わが滑空研究会の輝ける歴史を感じた。それと共に歴代の現役諸君が機体保存にどんなにか努力を払って来られたか判る光景でもあった。わが滑空研究会は創立以来、重大な人身事故を起こしていない数少ない大学滑空部で、本学部が日本大学が世の中に誇れるものである。このように安全な会に成長できた陰には、教官としての技術指導は勿論、徹底した安全教育を継続して下さる橋本耕吉助教授が居ってこそである。この度40周年を記念し、OB会より感謝状を贈り、わが滑空研究会の安全記録の更なる伸長を祈念する。

(機械7回卒)

「静岡アカシアの集い」開催 「アカシア・静岡女性の集い」結成

永田 進

工学部開設50周年を静岡の地で祝いたいということで、静岡在住・ゆかりの校友300余名が集まり、平成9年11月7日静岡メディアシティで、学部当局から中村玄正教授（学生担当）、神村哲美事務長、校友会から村田吉晴事業部長をお迎えして開催いたしました。

今回の催しは、静岡在住の校友の自発的な声により行われたもので、全て口コミでの連絡で、しかも急なことから全員に連絡出来なかったにもかかわらず、連絡出来た校友の90%が一つ返事で出席していただいたことは、団結力の強い「家族大学・工学部」の証になりました。

会の代表には、躍進する工学部にふさわしく、若き大澤俊幸氏（土木27回卒・静岡高教諭）が就任いたしました。



なお、当日は、開設当初の大先輩から若手まで、学科も全ての科にまたがり女性の校友もそのほとんどが出席し、大変な盛り上がりを見せました。とかく、このような催しは若手の参加者が少ない傾向ですが、今回は、20～30代の会員が多数出席してくれました。なお、この機会に女性校友をもって「アカシア静岡女性の集い」の発足も実現いたしました。

最後に、今回の会にあたり、多くの先輩諸氏の御協力、特に事務局の野口昌孝氏には多大な御協力をいただきました。厚く御礼申し上げますとともに、次回の御支援をお願いいたします。

連 ○静岡アカシアの集い

代表：大澤俊幸（土木27回卒）

絡

○アカシア・静岡女性の集い

先

代表：森 美佐枝（建23回卒）

（建築21回卒）静岡県立島田工業高校

「アカシア建築教育研究会」

事務局長代理 永田 進

教職に携わっている（元職も含む）建築学科の校友によって設立された「日本大学工学部・アカシア建築教育研究会」（名誉会長・佐藤平教授、会長・新井健一郎日大東北高教諭）の開設50周年記念・研究大会を、平成9年8月23日工学部キャンパスにおいて、盛大に開催いたしました。



参加者は、北は帯広・札幌から南は九州・四国迄全国各地から、名誉顧問の5回卒・斉藤久志郎先生、同・鷲山継義先生の大先輩から38回卒・矢作裕幸先生の若手まで、実に70余名にのほりました。当日は、午前中、キャンパス見学会、入試説明会、昼食の後は、総会、研究発表会、懇親会と充実した1日でありました。特に入試説明会では、高校部会の会員から、指定校等の取り扱いについて、格段の配慮を戴きたい旨、強い要望が出されました。是非共、学部当局に御検討をお願いしたい次第であります。

この会は、会員相互の教育・研究の向上と交流・懇親そして優秀な生徒を工学部へ送り込み母校の発展に寄与したいという願いをもって発足いたしました。特に工業高校建築系の教員は全国最多の人数を誇り、さらに母校工学部以外の大学、短大、専門学校、高専、中学校にも多数の校友が活躍されていることから、それぞれの連携を密にしてゆきたいと考えております。

なお、今大会の実施にあたり、蓬田和夫工学部長、神村哲美事務長、倉田光春教授はじめ建築学科教室の先生方には大変お世話になりました。又、来賓として出席いただきました中村玄正教授（学生担当）、福地利夫名誉教授、木村圭二校友会長、久野清市議員に厚く御礼申し上げます。将来は、全学科の校友教職関係者に拡大して、母校の発展に寄与したいと考えております。（建築21回卒）静岡県立島田工業高校

自動車用ディーゼルエンジンの発展について

トラック・バス開発本部 三菱自動車工業
エンジン実験部長

滝沢 秀行



はじめに

1970年3月に工学部機械工学科を卒業し、同年4月、三菱自動車工業株式会社に入社して以来現在まで28年間、トラック・バス用ディーゼルエンジンの排出ガス低減と変化する輸送業界の市場ニーズに対応すべく、設計および実験業務を行ってきました。特に自動車業界は、他の職種と比較して同業他社との競争が激しく、これまでの会社生活の全てが競争であったように感じています。以下に自動車用ディーゼルエンジンの変遷と、近年の排出ガス低減技術について概要を記述します。

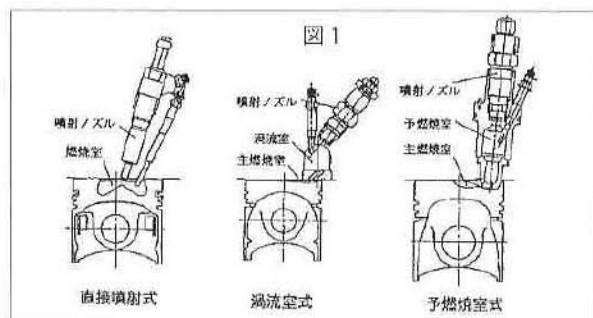
1. 自動車用ディーゼルエンジンの変遷

ディーゼルエンジンの誕生は、ガソリンエンジンに遅れること10年後の1892年にRudolf Christian Dieselがドイツ特許No.67207を申請した年とされており、誕生後105年になる。第2次世界大戦後、ヨーロッパではEECの結成に伴い経済圏の拡大と高速道路網の発達により、商用車用エンジンは経済性と耐久性・高出力化が要求される時代となった。

日本でも1948年に2000台/年にも達しなかったディーゼル自動車の生産台数は、10年後には2.6万台/年になり、さらに小型トラックの分野にディーゼル化の波が及び、小型ディーゼルエンジンの急速な発展を促した。

大型ディーゼルエンジンも飛躍的な進歩を遂げ、1958年には従来の積載量が6～8トン級の2軸車に加えて10トン級の3軸車が出現し、新しい区分である4トン車も1964年に誕生している。

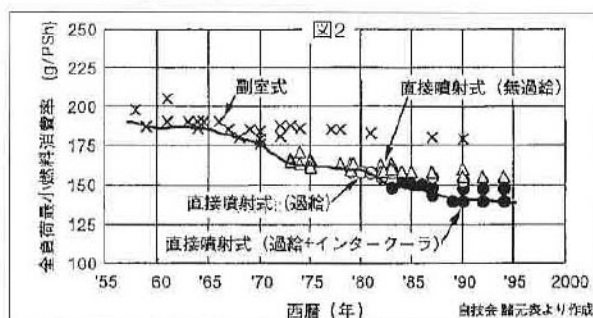
高速道路は1964年に名神高速道路、1969年には東名高速道路が開通し、商用車の高速化と大量輸送、すなわち、輸送効率の向上が求められた。1973年の第1次石油危機および1979年にイラン政変を契機とした第2次石油危機以降は、石油価格が高騰し続けたこともあり、大型エンジンで直接噴射方式への転換が始まった。ヨーロッパでは1954年のMAN社の後、1964年頃からBENZ社やDAF社が、日本では1967年にいすゞ自動車、日野自動車に始まり直接噴射方式の導入が続いた(図1)。



今日、燃料消費率向上・高出力化の手段として使われているターボ過給は、1905年A.J.Büchにより発明され、第2次世界大戦中は航空用エンジンに使われた技術であるが、自動車としては1954年にVolvo社が採用したのが最初で、それ以降1950年頃にアメリカを中心に発達した。

日本でも1960年代に一部のエンジンに採用されたが、過給機の効率も悪く、また無過給エンジンをベースとしたためにエンジンの耐久信頼性への対応技術が十分でなく発展しきれなかった。

1980年代に入り過給機の進歩と過給を前提としたエンジンの設計的配慮、さらに1978年にヨーロッパで空冷式インタークーラを装備して給気冷却をする技術が発表されてから、極めて信頼性の高いターボ過給エンジンが出現しており、日本でも1981年頃からトラック用に開発されて低燃費・高出力エンジンとして市場に定着し、熱効率も約40%以上に達している。これら一連の燃料消費率、即ち熱効率向上の歩みはディーゼルエンジンの技術革新を示す歴史であり、確実に時代と共に進歩している(図2)。



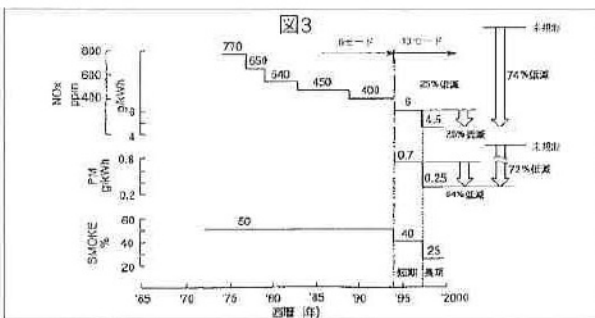
エレクトロニクス技術の自動車エンジンへの導入は、排出ガス規制への適用および燃料経済性の向上、安全のための運転性能の向上などの社会的要求を背景に、1980年頃からおもに燃料の噴射タイミングや噴射量の制御に使われ始めてから電子

制御の領域が拡大し続けている。

自動車が増加すると、人類の環境問題として排出ガスが大きく取り上げられるようになり、1972年に黒煙規制、1974年に排出ガス規制（ NO_x 、HC、CO）が実施され、年を追って順次強化されてきた。しかし車両台数の増加などにより、十分な効果が現れず、さらに大幅な削減が必要とされている。

2. 排出ガス規制動向

日本のトラック・バス用ディーゼルエンジンの黒煙と排出ガス規制は前述のとおり始まり、特に人体の影響が多いとされている NO_x と黒煙については年を追って強化され、'94年からは排出ガス濃度規制から重量規制に変更されるとともに、PM（Particulate Matter）規制も導入された。試験モードも6モードから、車両運行をシミュレートした中速主体のディーゼル13モードに変更され、1998～99年時点で未規制時から NO_x は74%、PMは72%低減する必要がある、 NO_x については現時点世界一厳しい規制である（図3）。



米国や欧州でも年を追って規制が強化されており、試験モードは車両運行をシミュレートした高速・高負荷主体である。米国は過渡モードで、現在は '98規制であるが2004年には NO_x が世界一厳しい規制導入が決定している。欧州は定常モードで、現在は Euro-2 規制であるが、2000年には Euro-3、2005年には過渡モードのEuro-4 規制導入も検討されている。

また、アジア・アセアン地域の台湾、香港、シンガポール、タイ、マレーシアなども米国や欧州の排出ガス規制を導入し始めており、日本の自動車メーカーは向け先国別に排出ガス対策仕様を選定しエンジン開発を実施しているのが現状であり、世界共通排出ガス規制の検討も進められているが、メーカーとしては早期に排出ガス規制の世界統一化を望んでいる。

3. 排出ガス低減技術

ディーゼルエンジンの排出ガスは、 NO_x 、PMの低減が最も重要であり、また双方とも同時に低

減することが難しいため現在も精力的に研究・開発を行っている。

NO_x 低減には燃焼温度の低減が不可欠だが、不完全燃焼となりやすくPM、燃費の悪化を招くことになる。PMの低減には燃焼の高温化や燃焼後期の空気導入改善により、再燃焼の促進が有効である。このように、 NO_x とPMの改善は互いに相反するトレードオフ関係がある。燃料消費率低減には燃焼の促進が必要であるが、これは NO_x の増加となる。PM低減のための高圧噴射は騒音の増大を招く。このように種々の相反する現象が多いが、実際のエンジンでは排出ガスはもちろん、燃費、騒音の問題にも配慮しなければならないため、各要因を解析しバランスよく低減を行う必要がある。次にこれまで実施してきた排出ガス低減技術について効果の大きいものについて述べる。

(1)燃料噴射時期の遅延

燃料の噴射時期を遅くすることは、 NO_x 低減に最も有効な手段である。初期燃焼期を膨張行程に移行することにより、シリンダ内の雰囲気温度が低くなり NO_x 低減効果が大きい。

(2)給気冷却（インタークーラ付過給）

ターボ過給エンジンでは、過給機通過後の圧縮された空気は100℃を超える高温であり、このまま燃焼に用いると燃焼温度が上昇する。この給気温度を冷却することにより、シリンダ内の雰囲気温度を低減させることが可能で、 NO_x 低減の有効な手段である。また、給気温度の低減はシリンダ内の空気密度が大きくなり、燃焼に関与する空気量が増加するとともに充填仕事も減少し、燃焼改善、黒煙低減、燃料消費率低減の効果がある。

(3)高圧燃料噴射

燃料噴射の高圧化は、噴射された燃料粒を微細にし、空気との混合を促進するため、PM低減には大きな効果がある。噴射圧力の増大には燃料噴射ポンプの大型化やコモンレールシステム、ユニットインジェクタなどが必要となってきた。

(4)燃料噴射ノズル先端部容積の低減

燃料噴射ノズル先端部は複数の噴孔の加工を容易にし、噴孔の流量係数を大きくするために袋状の小さな容積がある。これをノズルサックと称し、このノズルサック部の容積を低減することにより、燃料噴射後の後だれが減少し未燃燃料に起因するPMを低減することができる。

(5)EGR（Exhaust Gas Recirculation）

EGRは排出ガスの一部を再び吸気に還流させるもので、混合気中において比熱の大きい CO_2 濃度が増加し、燃焼時の温度低減により、 NO_x 低減

ができる。しかし、 O_2 の濃度が低下するため空気の十分でない高負荷域では黒煙およびHCが増加するので、EGRの使用は中低負荷域の使用に限られる。EGR効果を十分あげるには電子制御などによる負荷、回転数に応じたEGR量の精密な制御が必要である。

(6) オイル消費量の低減

PMは黒煙とSOF（未燃オイル分・未燃燃料分）から成り立っており、エンジンの改良で黒煙を低減していくと、燃焼によるもの以外にオイル消費によるSOF分もPMとして無視できなくなる。ピストンリング部からのオイルアップ、バルブシステム部からのオイルダウンによるオイルは燃焼室に入り、一部は燃焼するが残りはHCとして排出される。HCのかかなりの部分は黒煙に付着してPMを増加させる。

(7) 後処理装置

ガソリンエンジンでは三元触媒により NO_x 、HC、COの大幅な低減がなされてきたが、ディーゼルエンジンの場合は排気中に O_2 が存在するため同様の触媒は効果がない。また、PMに対しては酸化触媒あるいはDPF（Diesel Particulate Filter）で、 NO_x に対しては NO_x 触媒で除去するなどの新しい

対応技術が必要である。これらの後処理装置で低減する方法は、まだ低公害車などの一部に使用されているのみであるが、今後、燃費と排出ガス低減を両立させる方法として大きな可能性を持っている。

あとがき

以上、おもに商業車に使われている自動車用ディーゼルエンジンの発展と、これまで行ってきた排出ガス低減技術について記述したが、1997年12月京都で開催された地球温暖化防止会議で、 CO_2 の排出量削減目標値が決まったこともあり、自動車用エンジンの CO_2 の排出量低減、すなわち、燃料消費率の向上が省エネのみでなく今後とも重要なテーマとして社会の注目を集めることとなる。この観点からもディーゼルエンジンは、他の機関に比較して燃料消費率が良いため、トラック・バス用エンジンとしての必要性は衰えることなくますます増大するものと考ええる。そのためにも、ディーゼルエンジンの弱点とされている黒煙・排出ガス・騒音の低減は、永遠のテーマとして今後も研究・開発が必要である。21世紀を見据えたクリーンで静かな地球環境にやさしいエンジンの開発に今後とも努力し、同時に後輩の指導にも当たりたいと考えている。
(機械18回卒)

若葉マーク がんばり記

新入社員=無我夢中

初 め て

福島県北建設事務所 宗方直美



私は、平成9年春に日本大学工学部土木工学科を卒業し、現在、福島県北建設事務所に勤務しております。

私が所属している道路課都市・施設係の仕事は、都市の施設ということではなく、都市と施設、つまり都市局事業と道路局事業の2つに携わっています。主な内容は、街路事業と道路構造物（トンネル、橋梁等）の設計積算及び現場監督です。今は、街路を1つに橋梁を2つの3つの現場を担当していますが、まだまだ分からないことばかりのため、本で調べたり、まわりの先輩方に聞きながらの作業です。私の所属する係の仕事は、最近、新聞やテレビなどで耳にする「景観」に、最も身近に携わることのできる場であると思います。自分自身、「景観」というものに非常に興味を持っていましたので、今の仕事は、とても魅力があると感じています。

平成9年4月1日、初めての土地、初めての一人暮らし、初めての社会人としての生活が一度にスタートしました。期待を持ちつつも、毎日が不安と緊張の連続です。まわりを見る余裕すらなく、職場の人達の顔と名前が一致するまでは、だいぶ時間がかかりました。その上、両親と同年代の方々も多いため緊張してしまいます。自分ではそのつもりがなくとも、先輩方から「肩の力を抜いて」とよく言われました。それから、3ヶ月ほど経った頃、今まで気が張っていたのがゆるみ、体調を崩してしまいました。今では、一人暮らしにも職場にも慣れ、新しい生活を満喫しています。でも、やはり初めてのことがあると緊張してしまいますが……。ただ、「慣れる」ということには、良いことも悪いこともあります。職場の雰囲気慣れることは、もちろん良いことです。そして、悪いことというのは仕事で躓いた時などに、どうすれば解決するのか、また次回にどうすべき

であるのかを考えはするものの、「しょうがない」と心のどこかで思っていることです。また、就職する前には、「～にしたい」と思っていたことを忘れてしまっていたり、きまりが多すぎるせいか、今までの自分ではなく、何かの型にはまってしまったようにさえ感じました。「これではいけない」と自分の気持ちに変化ができたのは、いろいろな職業の人達と交流し、会話を待つ機会があったからです。確かに同じ職場の先輩方から学ぶことは数多いですが、同じ場所で物事を見ていると思考が固まってしまうし、つき合う範囲がせばまるとそれだけ視野が狭くなってしまいます。そういう面からも、いろいろなことに興味をもち、いろいろな方面の人達と携わって行けたら、現在、「お役所仕事」「役人の論理」などと世間から問題視されていることも少なくなると思いますし、自分にとってもプラスになると考えます。また、積極的に人と交流することで、相手からも関心をもたれるような人格を形成していきたいと思ひます。

福島県土木部の技術職には、建築職の先輩方が何人かいらっしゃいますが、土木職では、私を含めた5人が、平成9年度初めての女性採用となりました。男性の中の少ない女性ということで、顔と名前をすぐ覚えてもらえたり、気軽に話しかけられたりもします。また、仕事が多分らないで悩んでいると、自分の所属する係だけでなく、他の係の先輩方まで丁寧に教えてくれます。しかし、そのように女性というだけで優遇される反面、「どうせ結婚するまでの腰かけだろう。」としか思われない部分もあります。その他、所外の方との打ち合わせ時には、「秘書ですか。」と言われたこともあり、悲喜こもごもの毎日です。

就職したばかりの頃、「女性らしい感性で」と

よく言われましたが、女性らしい感性とはどのようなものでしょうか。イメージ的に女性らしいとは、やさしいとか家庭的などがあげられ、男性らしいとは、力強いとか小さい事にとらわれないなどがあげられるでしょう。しかし、それは今までの、固定観念が根強いのではないかと思います。男性の中には、女性以上に家庭的でやさしい人がたくさんいらっしゃいますし、女性の中にも男性以上に小さな事にとらわれず、どーんと構えている人もいます。現在、女性がどんどん社会に進出してきていて、男女共同で一緒に社会を築き上げるという世の中の風潮になっています。そういう中、私は、男性、女性というよりもむしろ個々人の感性が違うのではないかと考えます。しいてあげるならば、世代による感性の違いの方が大きいと思います。戦中、戦後の復興期、高度経済成長後の豊かな日本では、男女の感性の違いよりも世代による感性の違いの方が大きいのではないのでしょうか。

就職したての頃、私はあせりばかりが先立ち、男性に負けてはいられないという思いから、肩ひじを張りすぎていたように感じます。今、私は、女性というよりも若い世代の人間として、新しい視点から、土木行政、そして街づくりに取り組んでいきたいと思ひます。

最後に、就職してもうすぐ1年が経とうとしています。いろいろな面で「初めて」を経験しました。今後、更にいろいろな「初めて」があるでしょう。それにとまどうことなく、自分自身を長い目で見ていきたいと思ひます。

末筆ながら、母校のますますの発展と、校友の皆様のご活躍、ご健勝を心よりお祈り申し上げます。
(土木45回卒)

倉田 博先生を悼んで

建築学科 黒田浩司



平成9年12月10日、倉田 博先生がご逝去されました。

享年83歳でした。先生は、昭和26年に当時の第二工学部に赴任され、昭和59年3月定年で退職されるまで33年の永きにわたり、教育・研究指導・工学部の建設にあたられました。

先生は、手作りの構造力学の教材で、学生に対して常に温かい愛情のこもった教育をされ、工学部での構造力学教育の基礎を作られました。また、建築学科主任として科の運営に尽力され、本学部の発展に多大の貢献をされました。このような先生を失ったことに心から哀悼の意を表します。先生の長年にわたるご功績とご遺徳を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

校 友 短 信

土木工学科

- ◇熊谷秀哉（5回卒、青森市）(H9.9.11.受)
平成3年3月、青森県庁を勧奨退職し、大手建設会社の営業を2年勤めましたが、平成7年から自営で土地家屋調査士・行政書士を始めました。現在、職員は女房1人ですが測量機械とコンピューターを相棒に頑張っております。母校は、新幹線の車窓から時折り眺めておりますが、訪問するのは30数年ぶりです。よろしくお願い致します。
- ◇成田 卓（5回卒、長谷川体育施設(株)、川口市）(H9.9.29.受)
この度は、「母校を訪ねる会」又、「同級会&ゴルフコンペ」等参加の機会を頂き有り難うございます。しかし、この日は残念ながら都合が悪く欠席させていただきます。次回のお誘いを楽しみにしております。小生も元気でおりますので皆様に宜しくお伝え下さい。
- ◇菅原 仁（6回卒、仙台市）(H9.9.19.受)
「母校を訪ねる会」当日、祝事がありますので欠席いたします。元気で第二の人生を楽しく送っております。皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

建築学科

- ◇原田憲治（5回卒、府中市）(H9.9.8.受)
昨年、定年になりました。今、CADの勉強をしています。
- ◇山岸功一（5回卒、新潟県十日町市）(H9.9.5.受)
前回、「母校を訪ねる会」に出席してから早いもので20年が過ぎました。今回も出席し、40年振りの学友に一人でも多く再会出来る事を祈念しております。

機械工学科

- ◇安藤利明（5回卒、日立造船(株)、神戸市）(H9.9.26.受)
「母校を訪ねる会」に出席するのを、楽しみにしておりましたが、当日は仕事で北海道に行っておりまして、残念ですが参加できません。
- ◇日野嘉邦（5回卒、伊丹市）(H9.10.3.受)
期限ギリギリまで日程調整しましたが、「母校を訪ねる会」出席の都合が付きません。元気でいます。皆様によろしく。

電気工学科

- ◇西田修二（5回卒、藤沢市）(H9.9.29.受)
「母校を訪ねる会」の御案内をいただき有難うございます。折角の機会ですが、所用あり、残念ながら欠席致します。大学キャンパスの充実発展ぶりは、会報等にて伺っておりますが、益々のご清栄と「母校を訪ねる会」のご盛會を祈念申し上げます。
- ◇細野 聡（12回卒、フェニックスデザイン(株)）(H9.10.受)
私は、第二工学部電気科12回卒業生の細野聡と言います。学校を卒業して3X年が過ぎ、時々送られてくる「校友会報」を懐かしく見る年になりました。多くの校友が同じ思いでいる事ではないかと思えます。この度、弊社のプロバイダー事業(nasu-net)として、インターネットのホームページ上に「クラス会」を開設しました。詳しくは、次のホームページ・アドレスを参照のうえご利用下さい。
<http://www.nasu-net.or.jp> (ナスネットのURL)。

工業化学科

- ◇長沼和男（専1回卒、富士市大淵）(H9.12.18.受)
旧満州国鞍山市の中学に学び、引き揚げ後近くに日本大学（現工学部）が開設されたので、受験し合格。昭和22年に入学したことは信じられないことだった。スケート部に入部し、華やかなデビューの影に苦節あり、角帽時代は生涯の懐かしい残影である。

編集委員会からのお願い

校友会事務局へのお便りや連絡などから、無断で掲載しました。限られた紙面のため、卒業年度の古い方からのお便りを優先させていただきました。ご了承下さい。次号は校友会創設40周年にあたり、記念号を企画しております。学生時代の貴重な写真などをお持ちの方は、是非とも会報発行委員会にお貸しいただきたく、事務局までお寄せ下さることをお願い申し上げます。

日本大学工学部開設50周年を祝う

昭和22年、日本大学当局は、第2次大戦の混乱がいつ果てるともなく続く中で、日本を再興するのは『教育の力』にあるのだと信じて、当時の専門部工科を神田駿河台から郡山の地に移設し、これを発展させて現在の日本大学工学部の開設に至った。以来、多くの卒業生を輩出して、社会に大きく貢献してきたことは広く認められているところがあります。私共卒業生は工学部開設に携わった関係者各位の慧眼に対し心から敬意を表すとともに、本学に学んだことを誇りとするものであります。

このたび、工学部が開設50周年を迎えられたことに対し、衷心よりお祝いと感謝の意を捧げるものであります。

なお、工学部では、50周年記念事業として、式典や各種記念行事を開催し、学内外に今日の工学部の姿を紹介致しました。

○寄付金贈呈

工学部校友会では、工学部開設50周年記念事業達成を願って、かねて平成9年度通常総会で議決されたとおり、一金2,000万円を平成9年6月5日、工学部に寄付した。

贈呈は、工学部より蓬田工学部長、後藤工学部次長、本多事務局長、神村事務長、小林経理長、佐々木庶務課長、校友会からは、木村会長、佐藤幹事長、村田幹事(事業担当)、橋本幹事(会員管理担当)、渡澤幹事(会報発行担当)、森谷幹事の出席のもとで行われた。学部長から、「校友の皆さんの貴重な会費をご寄付いただきありがとうございます、有意義に使わせて戴きます。」との謝辞があった。



○工学部シンボルマーク

工学部を象徴するシンボルマークが欲しいという声は最近とみに高まっていた。50周年を期して、学内外から募集したところ、応募数は84点にも及んだ。最優秀賞には、電気工学科2年・新谷 勝、優秀賞には、機械工学科3年・小林紀昭、建築専攻(大学院生)2年・市川敬己の各君が選ばれた。

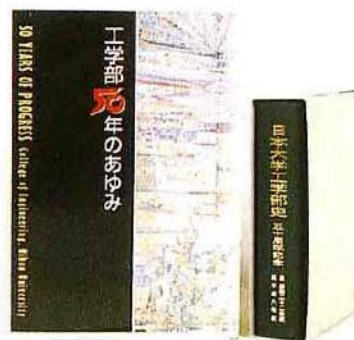


○懸賞論文

日本大学工学部開設50周年記念学生懸賞論文を大学院生・工学部学生を対象にして募集した。「大学が私に教えてくれたこと」と題して、工学部に入学した経緯、選んだ世界、学問の意義、更に今後の自己啓発などを綴った片寄衣通子さん(建築学科4年)が優秀賞に輝いた。なお、入選は、本多和恵さん(大学院2年・建築専攻)である。

○記念史・記念写真誌

日本大学工学部開設50周年記念史および工学部開設50周年写真誌が編纂された。これは、過去に編纂された日本大学工学部30年史や日本大学工学部開設40周年記念史・最近10年史などを基に、工学部資料室に蓄積された膨大な資料を整理して、工学部の草創期・黎明期・新生期・活動期・充実期・飛翔期なる6章をもって構成されている。記念史は930頁、写真誌は130頁の大冊で大変好評である。工学部では将来のために絶えず資料を収集していますので、写真などありましたらお貸し下さいますようお願い致します。

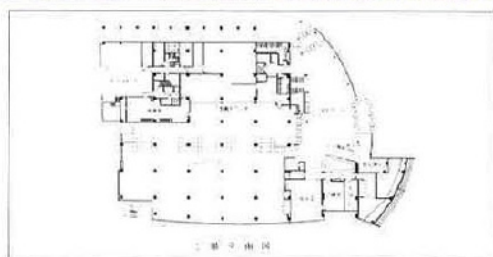


○記念館

工学部企画委員会で検討され、平成6年に答申された記念事業の一つに、50周年記念館の建設があった。学生諸君の福利厚生を主たる目的とするものであるが、在学生の父母や工学部校友会も利用できる。スペースは、学生ホ



ール・軽食堂・レストラン（1000席程度）・校友会施設・店舗などである。事業総額は31億円、募金目標3億円である。完成は平成11年5月の予定。



○記念式典

平成9年10月18日、日本大学工学部開設50周年記念式典は、日本大学ならびに工学部関係者、更に学外の関係者多数列席のもと大講堂において盛大に挙

○祝賀会

行された。式典の後、50周年記念祝賀会は、郡山市内のホテルハマツに会場を移して、720名余の参加者のもと盛大に催された。

地元経済界を代表して、郡山商工会議所会頭・大高善兵衛氏、さらに須賀川市長・相楽新平氏より祝辞を賜り、瀬在日本大学総長ら6名の植音で鏡割りが行われ、森田理事長の乾杯の音頭をもって祝宴となった。

アトラクションは、高等学校合唱界で常に全国のトップを占めている、安積女子高等学校合唱部員70名による素晴らしい合唱があった。

○記念シンポジウム

工学部開設50周年記念シンポジウムは、'97うつくしま景観フォーラム「守る景観，創る景観」をメインテーマとして、平成9年11月1日、工学部中講堂で学内外の関係者多数出席のもと、開催された。内容は地域社会に深い係わりを有することから、福島県や郡山市も参加した広範なものとなった。すなわち、近年ますます高まる良好な環境保持の気遣いに対して、都市の景観形成のあり方について、住民・企業・行政の立場から果たすべき役割を認識することをねらいとしていたものである。本学からは、佐藤平教授、三浦金作助教授が参加した。



日本大学工学部校友会会員各位

平成10年 3月 1日

日本大学工学部校友会長 木村 圭二

平成10年度通常総会通知

本会会則第15条により、日本大学工学部校友会平成10年度通常総会を下記の通り開催致します。皆様にはご多忙中とは存じますが、先輩・後輩お誘い合わせの上、多数ご出席下さいますよう、ご通知申し上げます。

記

1. 日 時 平成10年 4月18日(土)、午後13時より総会、同15時より懇親会
2. 場 所 日本大学郡山研修会館 郡山市愛宕町2-22 Tel 0249-23-4193
3. 議 題 (1)平成9年度会務および決算報告
(2)平成10年度事業計画および予算審議・その他
4. 懇親会 総会終了後、引き続き同所にて大学関係者を迎えて懇親会を開催
以 上

校友会創設40周年記念「総合名簿」発行

- 発行日 平成11年 3月 (予定)
 - 内 容 約39,000名の名簿 約700頁
 - 領布金額 6,000円 (郵送料とも)
 - 申込方法 同封の「振替用紙」にて平成10年 8月末日までお申込み (予約制) 下さい。
 - 名簿には「広告」を掲載予定。全頁7万円、半頁5万円。詳細は、事務局まで。
- 尚、会員皆様の住所・勤務先・役職等の変更は、同封の変更用紙にて投函して下さい。

平成10年度関東支部総会及び同・埼玉支部設立総会のお知らせ

- ◇開催日：平成10年 4月11日(土) ◇時間及び会場：未定
 - ◇内 容：総会及び懇親会 ◇費用：懇親会実費
 - ◇申込み：3月22日(木)まで、下記宛に申込み下さい。
- 関東支部：Tel 047-366-6113 / Fax 366-6112 (松岡宛)
埼玉支部：Tel 0485-57-1340 / Fax 57-2883 (城座宛)

第18回 母校を訪ねる会

日時 平成10年10月25日(日) (予定)

対象 第6回卒業生 (昭和33年 3月卒業)

第26回卒業生 (昭和53年 3月卒業)

今回は、上記年度の卒業生が母校訪問の主たる対象となります。しかし、この年度以外の方々のご参加もお待ちしております。是非ご来校下さり、母校と旧友との間の懐かしい一刻をお持ち下さい。

校友会報 第61号

発行所 日本大学工学部校友会
福島県郡山市田村町徳定字中河原1
郵便番号 963-1165
電話番号 0249-44-1327
FAX番号 0249-44-1327

発行部数 42,000部
発行日 平成10年 3月 1日
発行代表者 会 長 木村圭二
編集責任者 会報発行委員長 渡澤正典